

## 井上円了の哲学館附属東洋図書館構想について

教育学研究科博士後期課程生涯教育専攻 渡邊 雄一

### はじめに

井上円了（1858－1919）は、明治・大正期を代表する仏教哲学者であり、哲学館（東洋大学の前身）の創立者としても知られ、その著述だけでも百数十部に達する「仏教における福沢諭吉格の啓蒙家」<sup>(1)</sup>といわれる人物である。彼はまた明治28年から同33年にかけて哲学館附属東洋図書館の設立に尽力しており、この図書館は仏教書を収集することを目的とした仏教図書館であった。明治期に設立された仏教図書館としては、明治22年5月に松本順乗・大内青巒の首唱によって設けられた大日本仏教図書館や、明治34年に成田山新勝寺の貫主石川照勤によって設立された私立成田図書館や、明治36年6月に東大寺知足院住職三宅英慶の発議により設立された南都仏教図書館などがある。また、明治20年代から30年代にかけては、仏教系の各雑誌に仏教図書館の設立を主張する論説が目立つようになる。

明治20(1887)年8月、浄土真宗本願寺派普通教校の学生有志により創刊された『反省会雑誌』は、同25(1892)年5月には『反省雑誌』と誌名を改めているが、その『反省雑誌』第八年第九号（明治26年9月30日）に「図書館の設立を望む」<sup>(2)</sup>という社説が掲載された。ここで、主張されたのは、「仏教徒が率先其勢力の中心たる六条の近傍に仏教的一大図書館を設立し、博く内外の書籍を蒐集し、以て今日の必要に応ず可きは必須の急務なりと云ふべし」というものであって、図書館の設立は個人の事業としては難しいが、「仏教現時の勢力より見れば、僅々たる一個の図書館左程大層の事業に非ず。」そして、「直ちに東洋の一大図書館たるを得る豈難きの事ならんや。」と仏教徒

による図書館建設を訴えている。また、論説の最後は、「我党は現在の必要より、将来の利益より、門外公衆の為に、門内学者の為に、東洋文学の為に、日本仏教の為に、切に六条に一大図書館の設立を望む。」とし、「唯一日も早く其設立の慶報を耳にせんことを望むものなり。」と結んでいる。

この『反省雑誌』の記事について、平春生が論稿をまとめているが<sup>(3)</sup>、そこで平はこの記事について、「まず第一に図書利用の場としての図書館の必要を叫んでいる。然して更に第二に典籍保存のための図書館を論じているが、それも書冊をいたずらに高閣につらねるだけではなく、究極の目的は大衆を永遠に裨益するためにあるべきだと説いている。これらの主張は、現代の図書館論に通ずるものがあり、論者の進歩的意図に感服すると同時に、思慕の情禁じ難いものがある。」と評している。つまり、この論説で注目されるべき点は、仏教図書館を典籍保存の場としてだけでなく、図書利用の場、大衆を裨益するための施設と捉えていたことである。これは、明治期以前にはあまり考えられていなかったことであり、欧米の公共図書館思想の影響が推測されるのである。本稿においては、当時仏教界にあって最も図書館設立に情熱を傾けた人物の一人である井上円了の哲学館附属東洋図書館構想を中心に、明治期仏教図書館運動について考察するものである。

## 1. 明治仏教と井上円了

### 1.1. 明治10年代までの仏教界について

明治期の仏教者が行った教育事業は、明治初年の神仏判然・廃仏毀釈やキリスト教の流入による未曾有の危機を克服しようという意識が、その活動の根底に存在するという点で共通しているといえるだろう。廃仏毀釈とは、明治元(1868)年3月から10月にかけて、いわゆる神仏分離令が布告されると、全国各地で著名神社の仏教的物件の破壊的除去や地域の仏教寺院を宗派ごとに廃寺・合寺して強制削除が行われたことなどをさす。こうした廃仏運動に対して、仏教本来の立場すなわち仏戒の再確立を求める立場と積極的に維新政権の仏教再編に参画し、開明的立場から仏教の近代化を進めようという二つの立場から仏教の再興が図られた。

前者は、八宗の泰斗仏教界の柱石と称された浄土宗の福田行誠や護法、自

戒堅固を面目とした真言宗の釈雲照等がその代表者である。彼らは廃仏毀釈から仏教の回復ないし覚醒を図るには、仏教徒の墮落した現状を正視した上で、仏教本来の面目である戒律の復興が必要であると考えた。後者は、統一的近代国家において仏教がどうあるべきかを考えた人たちである。浄土真宗本願寺派の島地黙雷、赤松連城や浄土真宗大谷派の石川舜台などがその代表的な僧侶である。彼らの立場は、維新政権の開明的側面に応じて、単なる王法仏法などへの復古でなしに、ヨーロッパの近代社会、特に近代宗教の一つの指標として仏教の啓蒙的活動をすることにあった。

しかし、明治10年代までの仏教の諸動向は、廃仏毀釈に対して仏教国益論を取り、それが旧来の護法護国観にとどまった。文明開化とともに急速に普及した西洋科学思想は仏教として、教義との関係でどう受けとめるのかの問題を依然残したままであり、その適切な対応を欠いたままであったといえる。

### 1.2. 井上円了が明治仏教界に及ぼした影響について

明治20年代に入り、10年代の欧化主義の反動として国粹主義が勃興した。これを機に、欧米の哲学・理学等によって仏教の新解釈が行われ、仏教革新が唱えられ、それによって啓蒙活動を行う人々が出てきた。その代表的な人物が井上円了である。彼の思想の根幹は、まず仏教思想を哲学的、合理的に解釈し直し、それに基づいて仏教の国家的役割を明らかにし、さらにキリスト教の反哲学的、反国家的性格を論じて排斥することにあった。井上円了は『真理金針』初編<sup>(4)</sup>の中で、仏教教理の哲学的基礎づけをおこない仏教の真理性に立って、排耶論を展開している。彼は仏教とキリスト教の真理性を「学理」(哲学および哲学諸科)の観点から比較検討し、意識(唯識論)と因果(因果説)の原理から「仏教は学理に合し耶蘇教は学理に合せず」と断じ、キリスト教は仏教のなかの一部分であり、仏教は「学理上の宗教」であるが、キリスト教は「空想上の宗教」としてとした。そして、仏教が哲学の原理に基づいて理学の規則に従っているのに比べて、キリスト教の「天帝の空想を信するが如き」は「その懸隔天壤の比にあらざるなり」と断じている。

また、井上円了は『仏教活論序論』<sup>(5)</sup>においても、自らの思想遍歴を回顧し、仏教の優位性について次のように述べている。

真理を仏教、儒教、キリスト教に求めたが、真理と信すべきものを発見で

きなかったので、自ら真理を発見して新宗教を立てようと誓い哲学の研究に専心し、哲学のなかに真理を発見しようとした。そして、ある「一日大ニ悟ル所アリ余カ数十年来刻苦シテ渴望シタル真理ハ儒仏両教中ニ存セス耶蘇教中ニ存セス独リ泰西講スル所ノ哲学中ニアリテ存スル」ことを知った。哲学により何が真理であるかを知り、その真理観をもって再び仏教・儒教・キリスト教を検証してみると、「独リ仏教ニ至テハ其説大ニ哲理ニ合スル」こと、「純全真正ノ真理ハ仏教ヲ離レテ他ニ求ムヘカラサル」ことを知り、「欧洲数千年来実究シテ得タル所ノ真理早ク已ニ東洋三千年ノ太古ニアリテ備ハル」ものであったことを認識したのである。

『仏教活論序論』が出版されると、その反響は非常に大きなものであった。常盤大定は、「已に前に『真理金針』に因って、全く心酔せる後に於て、この論文に接したのであるから、世間の白熱的歓迎があり、当時何人も第一の著作として、此書を推したのであった。又事実、此頃これほど世間及び仏教界を動かししたのはなかった」<sup>(6)</sup>といい、『真理金針』と『仏教活論序論』について、「是あるが故に、明治仏教は異彩を放ち、是あるが故に、今日の仏教界あらしめたといつてよいほどの影響を与へた」<sup>(7)</sup>と述べている。また、村上专精は当時を振り返り、『『仏教活論序論』が出来たといふのを聞いて態々本郷まで之を買ひに来て、一昼夜の間に之を読了した。而して読了し終つて歎嗟すること深しと謂ふ有様であった」<sup>(8)</sup>と述べ、「当時の仏教家も又非仏教家も、この『仏教活論』によって、多少心を動かさぬ者は無かつたと謂つてよい、実に彼は一時の名著であつた」<sup>(9)</sup>と述べている。仏教界の混迷・混沌とした時代のなかで、『真理金針』と『仏教活論序論』の果たした啓蒙的役割は大きかったといえよう。

明治仏教における井上円了の意義は、仏教の哲学的基礎づけを行い、廃仏毀釈後の仏教を蘇生させる原動力となったことである。ただし、その啓蒙的・開明的姿勢に関わらず、明治10年代までの護法・護国・防邪につらなる古い体質から脱却しえていないことは否めない。近代仏教信仰の形成という点では、明治30年代の清沢満之の活動に委ねられるのである。

### 1.3. 井上円了の図書館事業

井上円了は『仏教活論序論』と『真理金針』によって、仏教こそが真理に

合致する唯一の宗教であることを主張した。ただし、当時の仏教は旧態依然としたもので、僧侶の「過半は無学無識にして時勢を知」らない状態なので、「仏教を改良して開明の宗教」とする必要があると述べた<sup>(10)</sup>。そして、僧侶を改良するのに最も必要なのが教育事業であり、それが哲学館の創設や仏教図書館設立の提言へとつながるのである。彼が図書館設立を主張する論説としては、①「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」<sup>(11)</sup>、②「仏教一切藏経購入有志寄附金募集趣意書」<sup>(12)</sup>、③「東洋学振興策并図書館設立案」<sup>(13)</sup>、④「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」<sup>(14)</sup>、⑤「仏教図書館設立の必要を述ふ」<sup>(15)</sup>の5つが代表的なものであるが、その発表年月を彼の事績と共に示すと以下のようになる。

明治20年 9 月	哲学館を創立
明治21年 9 月	第1回海外視察に出発（～22年 6 月）
明治23年 2 月	①「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」発表
明治28年 6 月	②「仏教一切藏経購入有志寄附金募集趣意書」発表
明治28年 8 月	③「東洋学振興策并図書館設立案」発表
明治29年 1 月	④「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」発表
明治32年10月	⑤「仏教図書館設立の必要を述ふ」発表
明治33年 5 月	哲学館図書館の開館式
明治35年12月	哲学館事件起こる
明治37年 4 月	哲学堂が落成、開堂式を举行
明治38年12月	井上円了、哲学館退隠
大正 4 年10月	哲学堂図書館落成
大正 5 年 5 月	「哲学堂図書館設置開申書」を東京府知事に提出

本稿においては、この5つの論説を中心に井上円了の図書館事業について考えたい。彼の生涯の中で図書館事業は、哲学館という学校事業の中で図書館運営をしていた時期と哲学館退隠後の社会教育運動の中で哲学堂図書館を経営していた時期の2つに大きく分けることができる。そうすると、①から⑤までの各論説は全て哲学館時代に彼が発表したものである。哲学堂時代においても、大正 4 年10月に哲学堂図書館が落成し、同 5 年 5 月には「哲学堂

図書館設置開申書」を東京府知事井上友一に提出し、同年7月には『哲学堂図書館図書目録』<sup>(16)</sup>を発行しており、図書館事業を重視していたことがわかる。

哲学館時代に井上円了が発表した5つの論説において、①「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」とそれ以外の②から⑤では、彼の図書館に対する考え方に相違がみられる。そのこともふまえ、次章では、哲学館時代の井上円了の図書館観について、彼の事績を追いながら考察していきたい。

## 2 哲学館附属東洋図書館設立構想について

### 2.1. 哲学館創設

井上円了は、東京大学文学部哲学科卒業の2年後、明治20(1887)年6月に「哲学館開設ノ旨趣」<sup>(17)</sup>を発表し、同年9月16日に哲学館を創設した。井上円了は『仏教活論序論』、『真理金針』において、主として仏教の活性化を直接の目標として、そのための重要な役割を果たすものとして哲学を位置づけていた。「哲学館開設ノ旨趣」では、そうした仏教界や仏教の改良というのが、日本人の改良と表裏一体となり、哲学的精神を日本人に普遍化することがその目標になっている。

哲学館の創設の翌年、井上円了は第一回目の海外視察に出発した。彼は生涯に三度の海外視察を経験しているが<sup>(18)</sup>、この第一回目の海外視察は、明治21(1888)年6月から一年間に亘り、欧米の政治と宗教の関係、東洋学の研究状況の視察を目的として行われた。この欧米視察は、その後の「哲学館改良」を決定づけると共に彼の図書館構想にも大きな影響を与えたのである。

### 2.2. 欧米視察と「哲学館ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」発表について

明治22(1889)年6月、約一年間の欧米視察から帰国した円了は、その知見をもとに翌23年1月に①「哲学館ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」を発表した。これは、欧米各国において東洋学研究が盛んであったことに井上円了が触発され、日本においても東洋学研究のための古書古像を蒐集する一館を設立する必要を説いたものである。その内容は、以下のようにまとめられる。

近来、欧米各国においては東洋学研究が盛んでインドや中国から古書古像

を買い求め「書籍館博物館内ハ論ナク或ハ特別ニ東洋部ノ一館ヲ設立シテ其内ニ夥多ノ古書古像ヲ陳列シ以テ講学ノ参考ニ供」されている。これに比べて既に日本には書籍館博物館が設立されているものの「未タ古学ノ考証ノ為メニ特別ニ古書古像ヲ保存スル」計画が無いのは講学上の一大欠点である。哲学館においては「東洋ノ諸学ヲ講究振起スル」ことをその目的としているので、「其参考ニ供スヘキ古書古像ヲ蒐集スル」ことが最も必要である。そして、哲学館内に古書貯蔵室および古像陳列所を設け、古書貯蔵室には「神儒仏三道及我邦ノ史学文学ニ関スル書籍」を収集し、古像陳列所には「神像仏像ノ外ニ神器仏具其他一切古学ノ考証ニ欠ク可ラサル什物」を収集したい。よって、この趣旨に賛成して「其所蔵ノ書籍什器若クハ多少ノ資金」を寄附していただきたい。

この①「哲学館ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」は、欧米視察後に発表されており、欧米の公共図書館の状況をみた井上円了が、それに触発されたことがよくわかる。しかしながら、円了の欧米視察の日記である『欧米各国政教日記』には、博物館については詳しく説明及び紹介がなされているが、図書館に関しては言及されていない。大英博物館について「一日竜動ナル博物館ニ遊ヒ其館内ニ陳列セル古今万国ノ諸品諸物ヲ見テ」<sup>(19)</sup>と記され、「是レ英国人民ノ学校ナリ」<sup>(20)</sup>とその教育的重要性について指摘し、博物館内に収集されている仏像の種類と数を報告しているが、大英博物館の書籍に関しては言及されていない。ちなみに、明治28年に発表された③「東洋学振興策并図書館設立案」には「其他竜動図書館中に東洋の書類を陳列せる一部ありて其中に日本書類も加はり居り」しことは、「余が實際目撃せる所にして」と記述されている<sup>(21)</sup>。つまり、円了は、大英博物館内の図書館も視察していたのだが、この時期は図書館にあまり関心が向けられていない。むしろ、図書館と博物館を一緒にしたような「古書貯蔵室古像陳列所」を設置しようとしており、主にその博物館機能に注目していたようである。

なお、井上円了は①の趣意書においては、「図書館」という用語を用いず、「書籍館」と記している。東京府書籍館が東京図書館と改称されたのが、明治13(1880)年であり、また彼が学んでいた東京大学にも明治14年には東京大学図書館が設置されていたが、この頃は未だ「図書館」という用語が普及

していなかったためと思われる。

### 2.3. 哲学館附属東洋図書館設立の経緯

井上円了は、明治28(1895)年6月に哲学館図書館を設立する意向を明らかにし、明治33(1900)年5月にその図書館の開館式を迎えるが、この間が彼の生涯の中で最も図書館設立に情熱を傾けた時期である。それまで、哲学館には図書室はあったが、独立棟としての図書館がなかった。この明治33年に建設された図書館が最初の独立棟図書館であった。それゆえに、井上円了の図書館設立に向けられた執念は相当なものであり、彼は図書館開設の基礎を明治28年から置くこととし、2、3年の間はこれに専念するつもりであるとまでいっている。以下、この時期における彼の足跡をまとめてみたい<sup>(22)</sup>。

井上円了は、明治28年6月に②「仏教一切蔵経購入有志寄附金募集趣意書」を発表し、図書館設立の意思を明らかにした。これは、黄檗版大蔵経6,930巻の翻刻、出版が明治28年4月から始まっていたので、これを購入して「図書館蓄籍ノ端」を開こうとして、有志者の寄付を募ったものである。この論説の中では、東洋学の振興を図ることが必要であり、その振興のためには東洋学に関する書籍を収集した図書館の設立が必要であると主張されている。その東洋学とは「国学漢学（儒学）仏学」のことであり、これらは我が国固有の学であるので、「国ヲ保チ民ヲ安ンセント欲セハ」これを興起しなければならない。東洋学の典籍浩瀚は幾十万を数えるが、この学を究めようと思うならばその書籍に頼らざるを得ない。よって、「一大図書館ヲ起シ、三学浩瀚ノ典籍ヲ蒐集シ、以テ学者ニ便セント欲ス」と、彼が図書館を必要とする理由について述べられている。この趣意書の中では、東洋学の説明に力点が置かれており、図書館の位置付けは、東洋学振興に不可欠な施設であるというものであった。

次に、③「東洋学振興策并図書館設立案」であるが、これは同年7月『東洋哲学』誌上に掲載されたものである。「日清戦争の結果將に我邦をして東洋の霸王たらしめんとするにつきては、我々は今より其準備をなさねばならぬは勿論の事であります」の一文で始まるこの論説は、日清戦争後という当時の社会的状況をよく反映したものと見える。ここで主張されたことは、同時期に発表された②「仏教一切蔵経購入有志寄附金募集趣意書」と同じく、



東洋学の学校をつくり、その学問の確立を図ることと図書館の設立を訴えるものであった。②と③の論説の主意は同じであるが、②が東洋学の説明に大半を割いていたのに対し、③では図書館の説明に重点が置かれている。

まず、東洋学振興策として「第一に学校を設置し、第二に図書館を開立するを要する」は異論なきこと信じる。「今を距る九年前に哲学館を設立し」たが、「学校のみにて図書館なきときは、兵士ありて武器なく、銃砲ありて火薬なきか如く、学生たるもの研磨の功績を挙ぐるに甚た難ければ、学校図書館此二者相待ちて始て東洋学の振興を見る」と思うので、「余は哲学館附属として図書館を開設することを天下に表白致しました」と、これまでも述べてきた彼の主張をまとめている。

西洋の図書館については、先の①、②の論説に比べて詳細に説明されている。西洋における図書館の起源、沿革を説明した後、英仏独三国の図書館の現況について、「仏国巴里の図書館は世界第一と称し、其蔵書の数二百五十万冊ありと云ひます」、「次に世界第二の図書館は竜動図書館にして、其書数印行の分にも百五十万冊ありて、年々増加する割合は三万冊に下らすと云ひます」、「次に伯林の図書館は百万冊の書籍を有すと云ひます」と各館の蔵書数を紹介している。次に、西洋における「東洋学の流行の結果、東洋の書籍著しく英仏独等の諸国に発行せらるゝ状態」について、ロンドンの書肆における東洋関係書籍の発行部数を示し、欧米各国における東洋学に関する書籍の発行部数も示している。これらは、『欧米各国政教日記』にも記されており<sup>(23)</sup>、先の海外視察で得た知見をもとに説明されていることがわかる。そして、「此の如く西洋の図書館及東洋書類発行の有様を述べ立つるは別儀にてはありません、唯余か一心我邦に東洋大学及東洋図書館を設立して東洋学の全権を握らんと欲」するからであり、「九年前に設立せる哲学館は他日東洋大学に組織する目的にして、之と併行して東洋図書館を哲学館内に設置」することについて、「本年より其基礎を置き、両三年間余は専ら力を此事に尽くさんと思ひます」と決意を述べている。この図書館建築費は二千円ないしは三千円かかり、かつ図書購入にも多くの費用を要するが、哲学館創立の時のように「東洋図書館の設置も精神一到すれば必ず成るに相違ありません」とし、法学院の高橋文庫、師範校の日高文庫の例を挙げ、「幾分の寄附を贈与せられんことを懇願致します」と賛助を呼びかけている。

この年の11月には哲学館東洋大学科・東洋図書館建築予定地として小石川区原町の土地を購入し、それにもない今度は、実際にそこに校舎および図書館を建築するための費用を募集することになった。

翌29年には新年の所感④「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」を発表し、哲学館東洋大学科と東洋図書館の設立の必要性を改めて主張した。その内容もほぼ前年の②「仏教一切蔵経購入有志寄附金募集趣意書」、③「東洋学振興策并図書館設立案」と同じである。新年にあたって改めてその必要性を訴えたということだろう。この月には、寄付金規則の改正を行って「哲学館東洋大学科并東洋図書館新築費募集広告」が出されている。

明治30(1897)年8月、宮内庁から哲学館に三百円の下賜金があったことがきっかけとなり、明治31(1898)年9月に「新築寄附金募集旨趣」を表明し、「新築寄附金募集規則」を制定している。

明治32(1899)年10月、井上円了は『仏教普通科講義』誌上において⑤「仏教図書館設立の必要を述ふ」という論説を発表した。この中では彼自身が設立しようとしている図書館を仏教図書館の観点からとらえている点で、①から④の論説とは違いがある。ここでは、修学には図書館が必要であることを主張し、西洋の図書館事情を述べた後、我が国の図書館が如何に貧弱なものであるかを示し、「仏書を研修せんと欲せば大に不足を感じるなり」と仏教学研究における問題点を述べている。そして、彼がそれまでに収集し、現在所蔵している仏書の種類と冊数を示し、「之を合計すれば余か所蔵中の仏書文にても大数二万巻の多きに及」び、仏教学研究の階梯となすに足りるが、「未だ閲覧室の設けなきを以て広く好学者の縦覧を許す能はざるは余が遺憾とする所なり」と述べ、「目下閲覧室建築の設計をなしたるに、其経費凡そ六千円乃至七千円を要す、是れ到底余が微力の奈何とも為すこと能はざる所なれば、広く寄附金を募集」したいとしている。そして、「以上仏教図書館設立の必要を述べると共に、広く天下同感の士の賛助を望むことは是の如し」と最後に結んでいる。

そして、いよいよ明治32(1899)年11月に講堂および図書館の新築工事が着手され、明治33(1900)年5月10日、その開館式が挙行された。

以上、井上円了が明治28年6月に哲学館図書館を設立する意向を明らかにしてから明治33年5月に図書館開館式までをまとめてみた。先述したように、

この時期が、彼の図書館設立の主張に最も熱が帯びていた時期であり、それだけに数多くの論説を発表していることがわかる。

## 2.4. 哲学館附属東洋図書館構想からわかる井上円了の図書館観について

①「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」、②「仏教一切藏經購入有志寄附金募集趣意書」、③「東洋学振興策并図書館設立案」、④「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」、⑤「仏教図書館設立の必要を述ふ」の論説の中で、②から⑤は哲学館附属東洋図書館設立運動の間に発表され、その主意は、東洋学振興（⑤では仏教学）のために哲学館内に図書館を設立することを訴えたものであった。それに対し、①は海外視察後、欧米の博物館・図書館が日本の美術品・書籍などを所蔵している状況をみて、それに類似する施設を哲学館内に設置しようとして発表されたものである。①と②から⑤では、論説を発表する目的に若干の違いがある。ただし、①から⑤までの主張には共通している部分があり、①の主張が核となり、発展したものが②から⑤の主張につながったと考えられる。その共通点とは、（1）欧米における図書館及び東洋学の状況について述べていること、（2）学校教育には図書館が不可欠であること主張していること、（3）図書館設立資金の寄付を求めていること、の3点である。

まず第1点目であるが、各論説で欧米における図書館及び東洋学の状況について必ず説明していることから彼の図書館事業の根底には、欧米視察の際の知見が存在すると考えられる。しかし、視察直後においては博物館機能と図書館機能の両方を整備しようとしており、哲学館附属東洋図書館の設立構想とはその内容に隔たりがある。よって、井上円了の図書館構想の背景には欧米視察で得た見聞の他にも、いくつか別の要因があったと考えられるのである。

次に第2点目であるが、これは学校教育に図書館が不可欠であることを主張したものだが、また同時に、井上円了の図書館設立の目的を示したものである。彼は「学校図書館此二者相待ちて始て東洋学の振興をみるべしと思ひます」<sup>(24)</sup>と述べ、哲学館における図書館設立の目的を東洋学振興のためとしている。よって、この図書館は東洋の諸学に関する書籍を収集することを目的とするのである。

第3点目は、論説の最後が募金を訴える一文で結ばれていることである。これは井上円了の教育事業の一つの特徴を表していると思う。哲学館は有志者からの寄付金のみによって設立されており、彼は図書館についても寄付金で設立しようとした。「余の死後の香典の代りに其死せざる間に多少の喜捨を懇請する所なれば、世間苟も余に一面識を有する仁人君子は死後の香典の前払と思うて幾分の寄附を贈与せられんことを懇願致します」<sup>(25)</sup>と死後の香典の代わりに生前の寄付金を懇願していることなど、彼の図書館に対する尋常ならぬ覚悟が窺い知れるのである。

### 3. 井上円了の図書館事業の背景について

#### 3.1. 他の仏教図書館の動向

先述したように、明治期の仏教図書館で著名なものには、明治22年5月に設けられた大日本仏教図書館、明治34年に設立された私立成田図書館、明治36年6月に設立された南都仏教図書館がある。このうち、井上円了が図書館を設立する意向を明らかにする前に設置されていたのは、明治22年5月に松本順乗と大内青巒によって設けられた大日本仏教図書館のみである。その趣旨について記されたものがあるので、少し長くなるが引用する。

然ルニ我国古来仏教ノ図書ヲ一場ニ蒐集シテ公衆ノ閲覽ニ供スル者アラス、且ツ諸宗祖師ノ撰述等、時ニ隆替アリテ行蔵常ナラス、僅ニ其原本ヲ諸寺諸山ニ秘蔵シテ世ニ示サハル者アリ、唯一宗ニ行ハレテ他門ニ及ハサル者アリ、故ニ輒近欧米人及支那朝鮮人等ノ来リテ仏教図書ヲ見ント欲スル者、諸寺諸山ヲ経歴シテ之ヲ尋求スルモ、尚其見ルコトヲ得サルヲ病メリ、且ツ夫レ近年諸寺諸山ノ頽廢ニ從ヒ、秘蔵ノ珍本ヲ散逸シテ其所在ヲ知ラス、或ハ既ニ海外ニ流落シテ我国ノ有ト為スコト能ハサル者少シトセス、誠ニ社会ノ一大欠典ト謂フヘシ。今ニシテ保存ノ法ヲ設ケスンハ、他日恐ラクハ臍ヲ噬ムノ日アラン、仍テ這回我輩同盟發起シテ大日本仏教図書館ヲ設立シ、現今世界ニ存在スル仏教図書ヲ一場ニ蒐集シ、一ハ以テ我国古物中尤モ古ク且精ニシテ、而シテ欧米諸邦未タ会テ之アラサル者ヲ永遠ニ保存シ、一ハ以テ仏教図書ヲ見ント要スル内外人ノ便覽ニ供セント欲ス、敢テ信教護法ノ謂ノ

ミニ非ルナリ<sup>(26)</sup>

大日本仏教図書館は、上記の趣旨で設けられたが、資金不足のため、開館することができなかった。そこで、大日本教育会と契約し、その蔵書を大日本教育会書籍館に収めて広く公衆の閲覧に供することにし、明治25（1892）年9月11日に大日本教育会書籍館の付設文庫として開館した。その辺りの事情について大内青巒は、「野生所蔵の一切経を始め其他卑蔵の書籍三四千冊を基礎と致し、兎に角開館致度と存候得共、貧乏にて其資無之に就き、不得已教育家の辻新次氏に依頼し、同氏所管の大日本教育会図書館に合併を請ひ、乃ち一橋外の同会館の門に大日本仏教図書館の表札を掲げ、とにかく有志者の縦覧を許し置き、」<sup>(27)</sup>と大日本教育会書籍館に付設となった経緯について触れている。

大内青巒は、『明教新誌』を刊行するなどして明治仏教界に広い影響力を持った居士仏教者であるが、井上円了ともまた深いつながりをもった人物である。彼は円了の東京大学在学中からの知己であり、後には大正3（1914）年に東洋大学第三代学長に就任している。

そして、仏教図書館設立者の中でもう一人井上円了と深い関係のある人物がいる。明治34（1901）年に私立成田図書館を設立した成田山新勝寺貫主の石川照勤である<sup>(28)</sup>。彼は哲学館の第一回卒業生（明治23年）であり、後年、東洋大学の顧問となっている。明治27（1894）年、26歳の若さで成田山新勝寺の貫主となった石川照勤は、明治31年3月から同33年4月まで海外視察を行っている。その視察の中で欧米の公共図書館に感銘を受けたことが契機となり、帰国後、私立成田図書館を開設した。1年間の準備期間を経て、明治35（1902）年2月1日に開館、翌日から一般公開している。開館時の蔵書数は1万5千冊（新勝寺所蔵本＜仏書・漢籍＞約7千冊、石川照勤所蔵本＜宗教・哲学・教育・歴史・地理・伝記・紀行・文学・語学・その他＞約7千冊、他に洋書約5百冊）であった。この図書館は、石川照勤が『私立成田図書館報告第壹』で「特に本館は地方教育の普及を計り一般智識道德の進歩発達を期せんがために、当初より閲覧料を徴せず繁雑なる規則を設けず、各種各階級の人の需要に応じて無制限に且殆ど無規則に其希望を満足せしめんと企画したり」<sup>(29)</sup>と述べているように、特別な利用規則をつくらず無料で一般に公開していた。

ちなみに、私立成田図書館が開館した明治30年代の中頃、相次いで大型の私立図書館が設立され独自の活動を行って日本の公共図書館界に色々な刺激を与えた。私立成田図書館の他に、明治32(1899)年の南葵文庫、同35年の大橋図書館などがそれである。これらの図書館に共通しているのは、その設立者が外遊し、欧米の公共図書館の隆盛を直接肌で感じて、それに感銘を受けて帰国後設立されていることである。なお、石井敦は、これらの私立図書館に関して、「彼らは私費を投じて民衆利用の図書館を設けたのであるが、これは日本の社会の近代化に伴う内部矛盾の顕在化を恐れた上流階層の一種の慈恵的思想のあらわれであろう。」<sup>(30)</sup>としている。しかし、大内青巒は大日本仏教図書館のために「金銭も随分遣い、松本は之が為に借金も殖し居候事」<sup>(31)</sup>と述べ、井上円了も図書館設立の為に寄付を募るのに苦労し、全国巡回を行ってまで図書館設立を志した。その活動に石川照勤が触発されて、図書館事業を起こしていたとしたら、石井の見解の別のところに動機があったとみて良いのではないだろうか。だが、成田山新勝寺は、肉山と呼ばれ資金潤沢な寺院であり、それ故に寄付金を募ることもなく、我国の図書館活動の主流をなしていた私立図書館の一つとして活動しえたのは事実である<sup>(32)</sup>。

### 3.2. 他学校の付設文庫について

井上円了の図書館構想には、他学校の付設文庫の影響も大きかったと思われる。③「東洋学振興策并図書館設立案」と④「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」には、東京法学院の高橋文庫、高等師範学校の日高文庫について次のように述べられた部分がある。

余か友人中に死後寄附を募りて文庫を設立したるもの先年来已に四五人もありました、例へは高橋一勝氏の死後寄附金を募りて高橋文庫を法学院内へ設置したるか如き、或は日高真実氏の死後寄附金を集めて日高文庫を師範校内に開設したるか如き、其一例であります、余も若し死なば必ず余か紀念に文庫設立等の相談もあるべしと今より予想する所なるか、余は寧ろ自ら其未だ死せざる間に図書館を設立するつもりであります、而して其例を高橋文庫、日高文庫等に取り、之を円了文庫と名けて哲学館内に置き、哲学館附属東洋図書館を組織する積りてあります<sup>(33)</sup>

ここで例に挙げられた法学院とは現在の中央大学であり、師範校とは筑波大学の前身の師範学校であり、当時は高等師範学校と称していた。高橋文庫については、『中央大学七十年史』に詳しく記されているが<sup>(34)</sup>、それによると、明治19年8月4日、英吉利法律学校（中央大学創立時の名称）の設立について、最も熱心かつ有力な創立者の一人であった高橋一勝が病没した。そこで、同20年9月に「故法学士代言人高橋一勝氏法律事業記念のため同志の義捐金を以て一の法律文庫を創設せんとす」（『高橋文庫創設趣旨書』）る運動が企てられた。その趣旨は、「從來邦俗にて名士の死後には碑を建てその記念と為し殊に近年に至り此の事一般に行はる顧ふに記念の要は固と事蹟を顕要して永世に垂るるにありと雖も抑々これを繋ぐに有益無害の事業を以てするに非ざれば記念の実を挙ぐるに難きものあり建碑の事の如きその建設の当時に於ては速に人の耳目にする所なるも日月を累ぬるに随い人々之を忘却した顧みざるが如き状態あり以て遂に記念の光を失ふに至るこれ他なし建碑の事は其之かために費すべき資金の多きにかかはらず却って之に伴ふの実益なきを以てなり今同学同志法律文庫を制設する直接の旨趣は故高橋氏の事蹟を顕要する一紀念に外ならずと雖もその間接の旨趣に至りては彼の実益なき建碑を以て記念の具と為す優れるに若かずと為す所以を示す」というものであった。すなわち、故人の蔵書をもって充てる文庫でなかったところに、この文庫の特色があり、建碑に比べてこうした企画の方が社会に有益であるという事実を示そうとしたものであった。

日高文庫についても、『筑波大学図書館史』にその設立の経緯が詳しく記されているが<sup>(35)</sup>、日高文庫は明治29年5月に高等師範学校教授日高真実の旧蔵書1,234冊を受け入れたことに始まる。日高真実は東京大学卒業後明治21年に教育学専修のためベルリンに留学、三年余りの勉学の後、同25年春に帰国し、高等師範学校教授兼文科大学教授となり教育学を担当していたが、同27年に亡くなった。日高教授はドイツ留学中、原価にして千円余といわれる多数の書物を求めていたが、教授を記念するためには、この書物に勝るものはないということで、義捐金を募って日高文庫が設立された。この発起人は、伊東祐徳他31名にのぼり、義捐金八百円を得て、目録の印刷等の必要経費を除いた七三九円八二銭を遺族に贈与している。なお、義捐金の拠出者の中には井上円了も含まれている。

### 3.3. 哲学館の賛助者

哲学館は、数多くの賛助者によって支えられ、教育事業を行っていたのであるが、その中でも勝海舟、寺田福寿、加藤弘之の三名は「哲学館の三恩人」として井上円了が特に感謝の念を強くした人たちであった。加藤弘之は日本にはじめて立憲思想を紹介した人物であり、進化論を中心にした政治哲学を展開し、明治10(1877)年には東京大学初代総長となった。哲学館創立にあたっては顧問となり、以後哲学館の発展を見守り続けた。寺田福寿は真宗大谷派の僧侶であり、当時駒込の真浄寺の住職であったが、ことあるごとに哲学館のために寺を開放して、協力を惜しまなかった。勝海舟については改めて述べるまでもないが、彼もまた哲学館の教育事業に対して協力を惜しまなかった一人であった。井上円了と勝海舟の縁をつないだのは、海舟の三女逸であった。逸は後の男爵、目賀田種太郎<sup>(36)</sup>と結婚していたが、円了が明治19年11月に加賀・前田家の御典医の娘・吉田敬と結ばれたときの仲人が、この目賀田夫妻であった。そうした縁があって、明治22年9月4日、円了は赤坂にある海舟の私邸を訪れた。きっかけは、「哲学館将来ノ目的」を読んだ海舟が、円了に一度会ってみたいと言ったことからであったようだ。時に海舟は67歳、円了は31歳で、二人の間には実に36歳の年齢差があった。円了はこの時、欧米視察のことや哲学館の計画について説明し、海舟はそれに対して自らの経験語りながら助言した。会談後、海舟は「あんなに若い人であったのか」と言いながら、その計画に感心していたという。

『海舟日記』には、明治22年9月4日の初めての会談以降、井上円了の名前が頻繁に記されている。例えば、明治22年9月27日には「井上円了、哲学院〔館〕へ百円寄附」<sup>(37)</sup>と記され、同年11月9日には「井上円了、十三日、哲学館開業の旨、古仏像、金子十五円寄附」<sup>(38)</sup>と記されている。明治29(1896)年1月には、「哲学館東洋大学科井東洋図書館新築費募集広告」の趣旨に賛成した海舟が「七十四歳ノ高齢ナルニモ拘ラズ老腕ヲ揮ヒ毎日若干紙ヲ認メテ之ヲ本館ニ施シ本館ヨリ四方ノ寄附者へ配布スル様」<sup>(39)</sup>にと協力を申し出ている。この勝海舟による「筆奉公」の申し出によって、哲学館ではその寄付者に対して、寄付金額に応じた証票、謝状等のほかに、さらに寄付者に対する謝礼として海舟の揮毫の贈呈が行われるようになった。海舟は能書家として知られ、その書は世評に高かったので、この助力は、哲学館の募金活



動をすすめるにあたって大きな力になったようである。ちなみに、募集金額に応じた揮毫の種類は以下の通りであった<sup>(40)</sup>。

金 五円	額面一枚（小画箋四ツ切）
金 十円	半折一枚（小画箋二ツ切）
金 十五円	半折額面各一枚
金 二十円	全紙一枚（小画箋）もしくは半折二枚
金 五十円	屏風半双
金 百円	屏風一双

なお、領収書には、この揮毫が勝海舟の直筆である旨の証明を付記した。また、神社、寺院、学校などから十円以上の寄付がよせられた場合には、特別に勝海舟から社名、寺号もしくは山号、校名をしたためてもらい、その額面を贈呈するものとした。

勝海舟は、①「哲学館ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」に応じて古仏像と金子十五円を寄付し、「哲学館東洋大学科并東洋図書館新築費募集広告」には揮毫することで井上円了を支援している。つまり、円了の図書館事業に対し、終始、援助し続けたのである。その理由については、いくつかあるだろうが、勝海舟自身が確固とした教育観及び図書館観を持っていて、井上円了の目指す教育像がそれに近かったのではないかということも考えられるのである。実は、勝海舟こそ我が国近代図書館成立の起点をなした人物であるといわれる程、海舟は図書館に対するしっかりとした認識を持っていたのである<sup>(41)</sup>。

明治25年(1892)年3月、日本文庫協会（日本図書館協会の前身）が、東京図書館長田中稻城の発起により創立されるが、協会創立初期にあつては、海軍文庫関係者が、協会発展に寄与するところ大であったと明治期図書館界の先覚者達は懐古録において述べている<sup>(42)</sup>。海軍では機械の知識が十分でないと操艦ができない。故に、伝統的に熱心に洋書を取り入れ、日本文庫協会の例会には中央文庫はもとより横須賀や佐世保の鎮守府からも熱心に参加したようである<sup>(43)</sup>。こうした海軍における文庫重視の伝統形成に、日本海軍の創始者ともいえる勝海舟は、大きな影響を与えたといわれている。

勝海舟の図書館に対する基本的な考えが現れたものに『海防意見書』があ

る。『海防意見書』とは、嘉永6(1853)年6月に浦賀沖に来航した米国艦隊提督ペリーの要求に対処するため、幕府が広く大名、旗本等に求めた意見徴収に応じ、勝海舟が提出した意見書である。この中で、海舟は軍艦の建造と共に教練学校の設立及び文庫の付置を言い、和漢蘭の兵書等を集めるべきことを述べている。

また、万延元(1860)年には、木村摂津守喜毅(軍艦奉行)を艦長に勝海舟が指揮官となり、幕府軍艦咸臨丸に乗り太平洋を横断し、サンフランシスコに渡っているが、この時、サンフランシスコ市にある商業図書館協会(Mercantile Library Association)が咸臨丸の歓迎を決議し、それを正式に文書にした招待状を咸臨丸一行に送っている<sup>(44)</sup>。この歓迎決議書が勝家に保管されていたことを考えると、勝海舟は欧米の図書館活動に感銘を受けた最初期の日本人の一人といえるのではないだろうか。

帰国後、勝海舟は神戸海軍操練所の頭取介になっているが、勝海舟自筆の『勝海軍塾蔵書目録』や『勝海軍塾所蔵洋書目録』が存在していたことから、同所には文庫が設けられていたと考えられる<sup>(45)</sup>。

哲学館創設にあたり、勝海舟は井上円丁にいろいろな助言をしたと伝えられているが、海軍の学校における自らの経験を通して、学校事業の中に図書館が不可欠であるという点にも話が及んだのではないだろうか。

## おわりに

明治39年、東京小石川音羽の護国寺内に仏教図書館を設立する計画があることを伝える『時事新報』は、その記事の中で当時の仏教図書館について、「未だ瞩目すべき程に至らざりし」としながらも、「目下市内にて仏教に関する図書の蒐集しあるもの」として「帝国図書館」、「帝国教育会内の図書館」つまり大日本仏教図書館、「巢鴨の真宗大学、哲学館、早稲田および三田等の学校内」の図書館、「其他成田山新勝寺住職石川照勤師が欧米を巡遊して帰国したる後図書蒐集の必要を感じ一兩年前数千円を投じて成田図書館を堂後の丘上に建築し重に仏教図書を蒐集したる」と紹介している<sup>(46)</sup>。哲学館図書館が数少ない仏教図書館の一つとして、仏教学研究等者の閲覧に供されていたことがよく分かる。

本稿では、井上円了が発表した ①「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」、②「仏教一切藏経購入有志寄附金募集趣意書」、③「東洋学振興策并図書館設立案」、④「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」、⑤「仏教図書館設立の必要を述ふ」から、彼が哲学館内に図書館を設立した経緯、目的、背景について考察した。

哲学館図書館設立の目的については、井上円了は「東洋学の全権を握らんと」するために学校（哲学館）を設立しており、学校教育に図書館は不可欠であるという考えから東洋図書館（⑤「仏教図書館設立の必要を述ふ」においては、それを仏教図書館と位置づけている。）の設立を主張した。よって、その目的は、東洋学振興のために東洋の諸学に関する書籍を収集することにあった。また、哲学館図書館設立の背景については、欧米視察の知見がその根底にあるものの、他の仏教図書館の動向、他の学校付設文庫、哲学館の賛助者からの影響についても考えなければならないことが明らかとなったのである。

## 【注】

- (1) 吉田久一『日本近代仏教史研究』川島書店 平成4年9月 8頁
- (2) 「図書館の設立を望む」『反省雑誌』第8年第9号 明治26年9月30日
- (4) 平春生「明治の一雑誌に現れた仏教図書館建設論」『京都図書館協会十周年記念論集 図書館の学と歴史』昭和33年7月 95-98頁
- (4) 井上円了『真理金針』初編 明治19年12月（『井上円了選集』第3巻所収 昭和62年10月 9-135頁）
- (5) 井上円了『仏教活論序論』明治20年2月（『井上円了選集』第三巻所収 昭和62年10月 327-393頁）
- (6) 常盤大定「仏教活論序論解題」『明治文化全集』第19巻宗教篇 昭和3年9月 35頁
- (7) 常盤大定「真理金針（初篇）解題」『明治文化全集』第19巻宗教篇 昭和3年9月 29頁
- (8) 村上专精『六十一年（一名赤裸裸）』丙午出版社 大正3年1月 261-262頁
- (9) 同上 262頁
- (10) 井上円了『仏教活論序論』（『井上円了選集』第三巻 昭和62年10月 352頁）

- (11) 「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」『天則』第1編第12号 明治23年2月(『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・下所収 286頁)
- (12) 「仏教一切蔵経購入有志寄附金募集趣意書」『東洋哲学』第2編第4号(明治28年6月)の付録として配布。同文を「東洋学振興策并図書館設立案」に再掲。
- (13) 「東洋学振興策并図書館設立案」『東洋哲学』第2編第5号 明治28年7月 216-221頁(『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・下所収 287-291頁)
- (14) 「謹て新年を祝し併せて期する所を述ふ」『東洋哲学』第2編第11号 明治29年1月 469-473頁(『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・下所収 291-295頁)
- (15) 「仏教図書館設立の必要を述ふ」『仏教普通科講義』第14号 明治32年10月 1-6頁
- (16) 井上円了『哲学堂図書館図書目録』大正5年7月、なお、井上円了は同書中の「図書目録緒言」で哲学堂図書館の概要を説明している。
- (17) 「哲学館開設ノ旨趣」『教学論集』第45編 明治20年9月(『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上所収 83-84頁)
- (18) 井上円了の海外視察は、第1回が明治21年6月9日から1年間、第2回が明治35年11月15日から8ヶ月間、第3回が明治44年4月1日から7ヶ月間の日程で行われている。
- (19) 井上円了『欧米各国政教日記』上篇 哲学書院 明治22年8月 99頁(『明治欧米見聞録集成』第15巻所収 ゆまに書房 昭和62年8月)
- (20) 同上 99頁
- (21) 「東洋学振興策并図書館設立案」前掲誌 218頁
- (22) 明治28年から同33年までの井上円了の図書館設立の足跡については、『東洋大学百年史』通史編Ⅰ、284-290頁に詳細に記されている。
- (23) 『欧米各国政教日記』前掲、ロンドン「トリビュナル」書肆については上篇100頁、東洋文学書類については下篇37-38頁。
- (24) 「東洋学振興策并図書館設立案」前掲誌 217頁
- (25) 同上 219頁
- (26) 竹林熊彦『近世日本文庫史』大雅堂 昭和18年6月 343頁
- (27) 「仏教図書館に就て」『反省雑誌』第11年第2号 明治29年2月20日 44頁
- (28) 石川照勤と井上円了の関係について記された文献には、太田次男『近代成田の礎を築いた先師』大本山成田山新勝寺 平成10年9月、太田次男「井上円了と成田山 石川照勤の修学との関連において」『サティア』第31号 井上円了記念学術センター 平成10年7月、がある。
- (29) 石川照勤「報告発刊に就て」『私立成田図書館報告』第壹 明治35年6月 1頁
- (30) 石井教『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会 昭和47年2月 246頁
- (31) 「仏教図書館に就て」前掲誌 44頁

- (32) 『文部省第三十一年報』(明治36年度)によると、明治36年の成田図書館の蔵書冊数は22,078冊、開館日数は338日、閲覧人数は3,072人、図書館経費は1,612円である。同じ年の帝国図書館の蔵書冊数は222,875、開館日数は334、閲覧人数は144,526であった。また、府立大阪図書館は蔵書数29,312冊でこの年に開館され、京都府図書館は蔵書数33,471冊、開館日数332日、閲覧人数28,020人、図書館経費6,035円であった。したがって、成田図書館が当時の府県立図書館に匹敵するだけの活動をしていたことが分かる。
- (33) 「東洋学振興策并図書館設立案」前掲誌 219頁
- (34) 中央大学『中央大学七十年史』昭和30年10月 37-40頁
- (35) 筑波大学附属図書館『筑波大学図書館史』平成元年 9月 17-20頁
- (36) なお、目賀田種太郎(1853-1926)は、在米国留学生監督であった明治9(1876)年に『書籍館ノ事』(『監督雑報』第12号)の中で、米国の図書館事情について報告している。その中ではアメリカの図書関数、蔵書数、『書籍館雑誌』のこと、1876年のフィラデルフィア図書館員会議のことなどについて述べられている。我が国にレファレンス・サービスを最初に紹介した人物も目賀田種太郎といわれている。目賀田のレファレンス・サービスの紹介については、北原圀彦「明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展」『Library and Information Science』No. 8 昭和45年、に詳しく記されている。
- (37) 「海舟日記」『勝海舟全集』21 勁草書房 1973年 8月 339頁
- (38) 同上 345頁
- (39) 「哲学館東洋大学科并東洋図書館新築費募集広告」『東洋哲学』第3編第1号 明治29年 3月 2日
- (40) 同上
- (41) 森川彰「海軍兵学寮文庫の創設」『同志社図書館情報学』12号 平成13年 25頁
- (42) 「懷古座談会」『図書館雑誌』第25年第1号 昭和6年 1月 3-23頁
- (43) 日本図書館協会『近代日本図書館の歩み 本篇』1993年12月 15頁
- (44) この歓迎決議書と勝海舟について記されたものには、橘井清五郎「洋式図書館の嚆矢」『図書館雑誌』63号 大正13年、がある。
- (45) 森川彰「海軍兵学寮文庫の創設」前掲誌 31頁
- (46) 「護国寺内の図書館」『時事新報』明治39年 3月 7日

